



# ほんとうの愛が見つからない理由 橋爪大三郎

ヨーロッパ的ラブ、日本的愛

「愛」は英語で、ラブですね。神の愛を、聖書でラブと訳したのです。新約聖書はもともとギリシャ語で書いてあるわけだから、愛の語源を遡るとギリシャ語にたどりつく。

ギリシャ語の愛には、三種類あるんだそうです。フィロス（知的な愛）、エロス（官能的な愛）、アガペー（無償の愛）。神の愛は、このうちアガペーである。フィロスもエロスも、対象に価値があるから愛することをいうんですが、アガペーの場合は対象に価値がないけど、いや、価値がないからこそ愛する。価値のない人間、罪深い人間を救ってやろう。そういう意味での、無償の愛なんです。

ちょっと人間には、真似ができない。キリスト教のラブは、もともとこんな、不可能な情熱を意味していたんですね。

キリスト教の教えは、ひと口で言うとなんか、せつなく神が人間を愛してくださっているのだから、人間同士も愛し合ひましょう。でもこんなこと、最初から無理なんです。人間はわがままな生き物ですから、ほっとけば互いにいがみあう。相手に知的な価値か、エロスのな価値を認めることができる場合にだけ、愛し合うことができるにすぎません。

でもこの、本来不可能な目標を目指そうとするところから、ヨーロッパ文明に特有の、愛の理想像が生まれました。ときにロマンチックで、ときに神聖で、人間にとってのもっとも価値のある営み。永遠の美をかたどったも

のとして、文学や音楽、芸術作品の汲めども尽きぬテーマとなってきました。いまわれわれの抱いている愛のイメージも、実はここに由来するものなのです。

神の愛を模倣して人間も愛し合おうという方法論、無理を承知で人間も愛を貫こうというスタイルは、宗教改革をむかえ、人間が近代的な自我に目覚め始めると、神と人間の関係をたいへん緊張したものにしました。

たとえば、人間はどういう場合に、誰と結婚すればいいのか。伝統的な社会では、選択の余地なく、親が決めてしまったりした。けれども、人間が自由になって、好きな相手を選んでもいいよと言われた場合、かえって困ってしまう。財産で選んだりしたら、だめ。

本当の宝は神の国に蓄えることになっていますから。家柄なんかもだめ。信仰（宗派）の一致は大切だけど、それだけでは決め手にならない。さあ困った。

そこで出てくるのが、個性です。人それぞれの個性（人格のあり方）は、利害や打算にもとづくものじゃないから、愛を育むのにもちよいとよい出発点になる。個性に魅かれ合う者同士が、愛し合って結婚する、という考え方が出てくるのが十七〜十八世紀です。

ここで、結婚・愛情・セックスの関係について、ちょっと整理しておく、最初は、結婚したら愛し合ひましょう、という考え方だった。またセックスは、結婚した相手とでなければ許されなかった。「聖書」が姦淫を禁じていたからです。

教祖が結婚相手を決めて、集団結婚式を挙げたりしている宗教団体がありますが、いまの考え方を厳密につきつめていくと、そうなるのも不思議でない。でも、結婚したとたんに愛し合えるかという点、それは無理だ。やはり結婚する前に、この相手なら一生愛せるという確信がほしい。愛情が結婚を正当化する——この原則から、愛しているから結婚する、という、恋愛結婚の観念が生まれる。

セックスは結婚してから。しかし、結婚するまでに二人は、しっかり愛情を育てていな

ければならない（どうやって?）。この結果、セックスと愛情とが、厳密な意味で分離しました。セックスと愛情とはまったく別々の問題だという、強固なイデオロギーを、こうやってキリスト教徒が発明したのです。

のエロティックな関係はいろいろあったけれども、ヨーロッパのラブの場合のような、精神性、抽象性はちっとも含んでいなかった。見方によっては「進んでいた」と言えなくもないのですが、とにかく日本人は、ヨーロッパ的なラブを理解する土壌を、まったく持ち合わせていなかった。これでは、ヨーロッパの文学だって理解できません。透谷は、これではだめだと思っ、「恋愛」という言葉の普及をはかり、なおかつ自分で実践してみせたわけですね。その結果、日本中の女学生が興奮し、自由恋愛に憧れるようになった。

いっぽう、日本語の「愛」ですが、これはもともと中国語でした。それが仏教用語として、入ってきた。仏教用語として、愛とは、ものごとくに執着するという煩惱のこと。「四苦八苦」と言いますが、そのひとつに「愛別離苦」というのがある。あつてはいけないもの、苦悩の源泉です。だから、漢字が入ってきてから江戸時代までの千数百年間、「愛」と言えば、いまと違って、マイナス・イメージの塊のような言葉だったんです。

明治になって、文明開化の最中に、キリスト教のラブを「愛」と訳したわけですが、何のことかわからない。自由恋愛の元祖である北村透谷なども一生懸命苦労して、『恋愛』がよいものだと説きました。全集などを見ると、彼が『愛』の新しいイメージを作りだすのに、いかに苦心惨憺したかがわかります。それまでの日本には「夜這い」とか、男女

自由恋愛のブームは、大正、昭和と続いていくわけですが、あくまでも夢にすぎない。実際にはなかなかできるものじゃなかった。明治民法のこしらえた家制度では、財産権や、結婚など身分の変更に關する権利は、女性にはなくて、すべて家長が握っていた。結婚どころか、自由恋愛もままならない。そんなことをすれば、すぐ刑事上、民事上の事件、スキャンダルになってしまふ。この、愛に關する理想と現実のギャップを、日本人は結局、戦後まで持ち越してしまつた。

愛とセックスと結婚と

愛というのは、一種のイデオロギーです。





愛といっても、これといった実体があるわけではない。たとえば、愛などと全然言わずに、結婚したり家族を営んだりしている民族がいっぱいある。もちろん彼らも、身内や友人を大切にするだろうけれど、それを愛だとは思わない。

それに対して、キリスト教の影響を受けた社会の人びとが、結婚に至る男女交際のプロセスに、いろいろな行動のパターンを築き上げた。それを愛の表現と考えて、価値を置く。両者の違いは、やっぱりイデオロギーです。

愛とは何かを煎じつめると、それは、われわれの目に見えるもの（セックスや食事や労働や……）の背後に、目には見えないけれど確実に信じていることのできる、本当の何かがあるという信念なのですね。そういう目に見えるものを正当化すべきだ、と考えるのです。キリスト教徒は、愛に忠実に生きるのが義務だから、結婚は愛の成就でなくてはならない。結婚は愛情がなければ、してはいけないものになってしまった。

ところが、このように愛を考えていくと、愛と結婚がバラバラのものになってしまします。

愛を感じたら結婚しよう。じゃあ、愛がなくなったら、結消は解消しましょう。愛がなくな

い結婚は正しくないのだから、別れなくてはならないのです。愛を重視すれば、離婚が増えます。また別の人に愛を感じたら、その人と再婚すればいい。——でも、これは面倒くさい。それなら何も、愛を感じたからと言って、いちいち結婚することはない。そうなる、愛とセックスの関係も、変化せざるをえない。

恋愛結婚の考え方の出発点は、愛情↓結婚↓セックス、だった。人間はエロ的にふるまう生き物ですが、それはなるべく結婚の枠の中にとどめておき、それとは別に、純粹に愛を確かめよう、ということだった。愛とセックスが分離できたのは、間に結婚が挟まっていたからです。ところが、結婚がどうでもよくなると、愛があるからセックスする、というストレートな関係になる。愛があればセックスする。愛がなければセックスしない。愛がセックスを正当化する、という関係になります。

これでいいみたいですが、そもそも愛を、セックス抜きに確認できるものなのか。昔だったら「結婚しよう」と言えば、最高の愛の表現だったのが、そうじゃなくなった。それに男どもは、セックスしたいばかりに「愛してる」などと言いますから、見分けがつかない。愛を結婚より上位に置いてしまうと、愛

とセックスの境目があいまいになり、かえって愛が脆いものになってしまふのです。そこで開き直って、愉しめればセックスだけでいいじゃないか、という考え方が出てくる。いわゆる「性の解放」です。

アメリカ映画なんかを見るとよくわかりますが、五〇年代から六〇年代の始めまで、セックスとその前段階のベッティングとの間に、非常に厳格な一線があったんですね。愛とセックスは違うんだ、というイデオロギーが引いた一線です。

なぜそんな線があるかというと、やはり愛情というのは、彼らにとって一種の相互契約なんです。目に見えない場所に神様がいて、神様によって二人が正しい結びつきであることと承認してもらおう。その確認が得られ、晴れて結婚してからセックスする、というのが正攻法。でも本来、愛とセックスは切っても切れないものだから、結婚してからのセックスと似て非なる方法で、愛を確認せざるをえない。それがベッティング文化なわけです。

ところがこの一線も、六〇年代の終りに、崩壊してしまふんです。ベッティング文化がすたれて、デートのパターンが変化する。それとともに、ダンスも変化する。それまではソシアルダンスみたいな、ペアになって身体接触を伴うものが主流だったのが、ツイス

トやゴーゴミみたいな、お互い離れてバラバラに踊るダンスがとって代わった。つまりダンスは、カップルが親密さの度合を深めていくプロセスのなかに位置づいていたのが、そうでなくなりました。誰とでもすぐセックスできるんだから、そんなもの必要なくなりました。

性の解放で一番話題になったのは、スウェーデンですが、日本ではどうも誤解されているふしがある。スウェーデンでは、結婚・離婚の繰り返しは煩雑で、社会的責任も伴なうので、それを敬遠する人びとが増えた。結婚は持続的だけれど、愛はそうとは限らない。そこで、三年なり五年なり一緒に暮らして、あとはまた別の人を探しましょう、というスタイルになった。事実婚が増えて、結婚しないでも子供を産むようになったのです。それに尾ひれが付いて、フリーセックスということになってしまった。

スウェーデンの人びとの態度は、愛に対してまことに厳格だと思おうのですが、それにひきかえ日本では、愛の観念が希薄である。

明治以降、愛情の代わりに幅をきかせていたのは、「純潔」という観念。セックスの汚染を免れていることに価値がある、というイデオロギーです。純潔は、女性が結婚するた



めの資格みたいになっており、極めて重視されていた。

純潔のイデオロギーが崩れたのは、昭和四十年前後と思いますが、これは従来の「家の崩壊ともつながっている。日本では、それまで長い間、結婚は家と家との問題だった。そこに恋愛の原理は、なかなか入りこめなかつた。ところが、都市化が進み、みんなが都会に出てきて、一代限りの家族を形成するようになったんですね。家ではなく、ただの家庭（家族）になった。それに並行して、昭和三十年ごろから愛のイメージが普及して、いわゆる近代的な恋愛結婚も増え、純潔のイデオロギーが希薄になっていくんです。

ただし、だからと言って、愛のイデオロギーが確立したのかというと、かなり疑問が残る。ヨーロッパ的な愛は、やはり宗教と不可分なものなのであって、宗教を信じていない日本人は、そういう意味での愛を、やはり信じたことにはないと思おうのです。

それなら、日本人にとって愛とは何なのか。恋愛結婚は、個人の選択性が高まるということなわけです。愛が一種の選択なら、この人しか選択できないというのが、究極の愛ですね。言いかえれば、愛情が、当人同士の自由意思や気まぐれを越えた、何か必然的な結

びつきたと最高なわけです。ところが実際には、選択は他でもよかつた。いくつも選択肢があるから、選択なんです。それでも他に選択の余地はなかつたかと考えるのが、愛のイデオロギーである。本当は他の人でもよかつたかもしれないけれど、この選択以外にありえなかつた二人が思い込めたとき、その確信こそ愛である。……でも、普通の人は、なかなかそういう確信を持ってないんじゃないでしょうか。

そもそもそういう確信が持てるためには、人間一人ひとりが十分違っていないければならないはず。他の人とは違う個々人の、かけがえのない価値が認められなくてはならない。しかし、われわれが手軽に手に入れることができるのは、そういう個々人についての知識ではなくて、人間を類別するためのおまかなカテゴリーにすぎません。どこそこの大企業に勤めているとか、何大学を出たとか、身長が何センチだとか、自宅に住んでいるとか。そんなのは、その人についての知識じゃなくて、その人がどういうカテゴリーに属するかという、ただの情報にすぎない。でも、このごろの結婚に関する情報には、そういうものが圧倒的に多いんです。それは、選択肢の数を減らすのに役立つとも、愛に結び



つくまで互いの必然を高めていくものではないのです。

互いの個性や、その人にしかない輝きを見せ合うチャンスが、恋愛を育てるプロセスには織り込まれていくとかならない。そういうチャンスを生かす方法、出会いを育てる文化が、日本ではとうとう根づかなかった。八〇年代に入って急速に、恋愛のマニユアル化が進行しているのも、それが背景です。ふつうに暮らしているも、恋愛のチャンスが充実していれば、どんなカテゴリーの相手を探せばいいとか、恋愛のマニユアルなんか気にならないはずなんです。

### 愛を学ぶ場所がない

恋愛は、学ぶもの、経験を積み重ねる中で習得していくものです。つまり、文化なのですが、それではいいたい、どこで学ばいいの。

学校では教えない。会社でも教えてくれない。アメリカだったらハイスクールで、卒業のダンスパーティーがあったりしますが、日本にはそういう発想が全然ないですね。この特集は「愛の学校」だそうですが、日本には、人を恋愛するように仕向ける工夫や制度が、根本的に欠落している。愛を十分に知ら

ないで、豊かな人生が送れるとも思えないんですが、本人の幸せになることだからちゃんと学習すべきだ、なんて誰も思っていない。家庭も学校も、愛を学ぶ場所ではない。

昔は、あったんです、そういう場所が。農村には若衆宿なり何なり、同世代グループの文化があって、男女交際のやり方を教える伝統みたいなものが生きていた。それが、ほぼ完全になくなってしまったのが、現代の都会の特徴です。

大体、恋愛は時間がかかりますからね。短くても数カ月、普通は何年もかかって、かなりの時間とエネルギーを投入しなければならぬ。それに、がっくり落ちこんで、立ち直るのにも相当時間がかかる。だから、そんなに何回もできるものじゃない。仮に三十歳で結婚するとして、せいぜい三回から五回恋愛してれば多いほうでしょう。つまり、限られたチャンスの中で、どんどん愛を習得していかなきゃならないわけで、大変だ。

だから、恋愛の実際を、ある程度事前のみこんでいたほうが、うまくいく。昔は、文学や映画で修業した。いわばシミュレーションだったわけですが、いまはそれもダメになってしまった。その代わり、トレンドイ・ドラマが人気ですが、テレビはやっぱり表面的です。恋愛の展開は描写できるけれども、実

際に自分がその場に臨むのとは感覚がまったく違う。むしろ、実際の恋愛をしないですませるための代償行動みたいな側面もあるみたいで、手放して喜ばません。

人間はかなり柔軟な生き物ですから、若いうちにきちんとトレーニングすれば、相当効果があるはずですよ。あまり恋愛もしないでおじさん、おばさんになってしまつと、どうしたって人間が薄っぺらになる。愛は人格に奥行きを与えると思うわけです。

恋愛は、自分が唯一の存在である、ということに気づくチャンスでもある。自分が相手に選択されるということはすごいことです。なぜそういうことが起こるのか、よくわからないのですが、「私」はこの世の中にひとりだけしかないわけだから、そういうことが起こっても不思議はない、と納得する。だから恋愛は、自分が人間として生きているとはどういうことか、気づくチャンスでもあるんですね。もちろん、他の方法で気づいてもいいのだけれど、恋愛ほど深くトータルな体験は、普通の人には得がたいことだ。

ただ、さっきも言ったように、宗教的な背景の裏付けがないのに、恋愛を日本の社会制度の中に位置付けようとしても、無理がある。これは何も、恋愛に限らずとも、思想も

の空論に終わってしまった。愛が効力を持つ範囲と、それ以外の社会的な価値が効力を持つ範囲は違っている。だから、愛の教育システムも必要になるんです。

いま、そのために社会がやっていることと言ったら、せいぜいテレビで愛のイメージを流すことくらい。愛するとは、具体的に他人に関わることでですから、映像をながめているだけじゃ学習にはならない。

だから、恋愛が苦手な人は、まず異性の友人を十人以上作ることを出発点とすべきなんです。ただの友人でいい。友人というのは、じゃあねと別れて、つぎに用があつて連絡するときに、相手のことを知らなくていい関係という。だから財産のように、人数を増やせるんです。なおかつ、人格的な関わりはいくらでも深められる。

具体的な人間に関わる訓練としては、幼馴染みの近隣集団や、中高時代のボランティア活動が、案外役に立ったりするんだけど、いまその役割を多少なりとも果たしているのは、大学のサークルくらいだろうか。でも愛の教育機関としては、はなはだ手薄で心許ない。生まれつき愛の素質が備わっている人は、まあいいですけど、ちょっと不器用な人に、愛は手に入りくい時代ですね。(社会学者)

人間を超えた何かを信じなければ、愛を本当には信じられないんです。それは、神でなくとも、宿命だって運命だっていい。なんでもいいけれど、少なくとも自分や相手の自由な意思を超えた何かを、二人で共通に信じることができればいいんです。戦前の日本には、伝統やしきたりがありましたから、それはそれでうまく行っていた。戦後は、個人の自由を超えるものは何もない、という教育をしちゃいましたから、恋愛の自由が手に入らなかりに、恋愛がかえってできにくくなつてしまったんですね。

愛のイデオロギーを信じていなくなつて、もちろん生きていくことはできます。でも、生きていく意味を見つけないことはできない。

日本人が何かを決めるのが下手なのは、今度の湾岸戦争を見てもわかりますね。自由はありふれていても、何のための自由なのか考えていないから、いざというとき何をやっていいのかわからない。政治的な決定ができない。

愛情も同じです。私もあなたも自由。じゃあ、二人で一緒に何かをしましょうというこ

